



うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌

第11号

発行日：平成11年9月30日

編集発行：魚津埋没林博物館

印刷：魚津印刷(株)

坊様、今年もござった



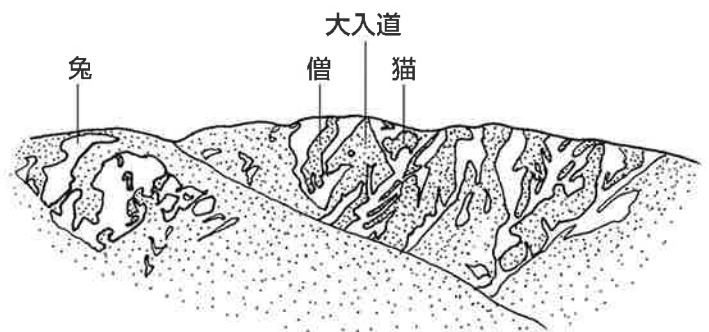
魚津市南東になだらかな山容を見せる僧ヶ岳。毎年、雪どけが進む4月から6月にかけて、頂上付近の山肌に「雪絵」が現れます。僧、大入道（虚無僧）、猫、兎、鶏などがあり、雪どけの進行とともに形や種類が変化していきます。

雪絵には、山肌の黒い部分の形を見るもの（僧、猫など）、残雪の白い部分を見るもの（兎）、黒と白が入り混じったもの（鶏）があります。

昔から魚津市や黒部市では、この雪絵を農作業や川の水量の目安として利用してきました。しかし、農業の近代化にともなって、この雪絵の持つ意味もだんだんと薄らいでいるようです。

毎年ゆっくりと現れては消えて行く坊様、何かと変化の激しい下界を見下ろして何を思うのでしょうか。

（企画展「僧ヶ岳」から）



僧ヶ岳で見る植物と雪の親密な関係

学芸員 石須 秀知

魚津埋没林博物館では、平成11年8月16日から10月31日まで、企画展「僧ヶ岳」を開催しました。僧ヶ岳は魚津市の南東に位置し、標高1855メートル、北アルプス立山連峰の北端の山です。表紙でも紹介したように、地元では雪絵の山として親しまれています。



雪をかぶる僧ヶ岳

僧ヶ岳で特筆すべきは、何と云ってもその多様な植物相です。標高1885メートルは決して高い山ではありません。しかし、山脈の最前線にあたるため季節風の影響を強く受け、他では見られないような植物群落が形作られています。そして、これらの植物と雪との間には、密接な関係があります。

富山県東部山岳は、世界有数の多雪地帯です。冬の間、大陸からの季節風が日本海の水分を雪雲に変え、山脈に突き当たって多量の雪をもたらします。山は、長い期間何メートルもの深い雪に閉ざされます。僧ヶ岳も例外ではありません。

この深い雪は当然植物たちに大きな影響を与えます。重く冷たい雪の下に長い間閉じ込められるのは、厳しい条件のようにも思われます。確かに、雪の重みによって幹や枝が折れてしまったり、根こそぎ倒れてしまう場合もあります。植物に対する雪の作用にはこのようなマイナスの面もありますが、多雪地帯に適応したユキツバキやチシマザサなどの植物はそのようなストレ



ユキツバキ

スに柔軟に対応する力を身につけています。

一方、雪にはプラスの作用もあり、多雪地帯の植物にとってはその方が重要な意味を持っています。厚く積もった雪の中の温度は、ほぼ0度です。0度というと冷たいように思われますがマイナス10度を下回る山岳地帯の冬の気温からみればずっと暖かく、温度と湿度が保たれた布団をかぶったようなものです。そして春には雪はとけ、植物の生育に必要な水を十分に供給してくれます。このように、多雪は一見過酷な条件のように見えて、実は豊かな植物相を支えている大きな要因になっているのです。

ところが、この雪深い僧ヶ岳の中で、山頂の北側にある「仏ヶ平」と呼ばれるなだらかな斜面では、少し状況が異なります。仏ヶ平は草原と高さ1メートルほどの背の低い生け垣のようなキャ



キャラボク

ラボクやホツツジなどの木々に覆われています。夏には、ニッコウキスゲやシモツケソウ、タカネバラなど色とりどりの花が草原一面に咲き競います。長い登山道を登ってきた者に憩いをもたらす”仏”の名にふさわしい場所と言えます。



ニッコウキスゲ

しかし、1800メートルの高度は、普通の山なら樹林帯です。このような草原と低木林がどうしてここにでき上がったのでしょうか。その謎を解くヒントは、春の雪どけの様子から得ることができます。春、僧ヶ岳の大部分がまだ白い雪に覆われている頃、すでに仏ヶ平の部分だけは雪がなくなっているのが平地からも見えます。雪が早く消えるということは、それだけ雪が少ないということです。

仏ヶ平の直下には、片貝川の支流の別又谷が突き上げています。冬の強い季節風はこの別又谷に吹き込み、仏ヶ平に集中してぶつかります。この激しい風によって雪は吹き飛ばされ、仏ヶ平には真冬でも1メートルからせいぜい2メートルぐらいしか雪が積もらないのです。

他の場所より際立って風当たりが強いのに、このような浅い積雪では、大きな樹木は雪の保護を受けることができません。木々が夏の間にとれだけ成長しても、雪からはみ出してしまおうとその部分は強い寒風にさらされ、枯れてしまいます。その結果、一定の高さで刈りそろえた生け垣のような形の低木林と草原ができあがります。夏の”仏”の顔の裏には、冬の過酷な環境が隠されているのです。冬の厳しい修行に耐えてこそ、夏の仏の顔を見せることができるのです。

では、強風のため仏ヶ平に積もらなかった雪はどこへ行くのでしょうか。夏、山頂近くから

仏ヶ平を見下ろすと、仏ヶ平から尾根を越えた反対側の斜面に残雪が見えます。この雪は、夏のかなり遅い時期まで残っています。仏ヶ平に積もらずに尾根を越えた雪が、風の死角になる尾根の反対側に吹きだまりとなって他の部分より厚く積もったものです。



仏ヶ平と尾根の反対側の雪田

このように雪が遅くまで残る部分は雪田と呼ばれます。低温で暗い雪の下では、植物の成長は抑えられ、端の方から雪が消えるにつれて順に植物の活動が始まります。雪田では植物が生長できる期間が短く、背の高い樹木が生育できず、草地になります。雪田に生育する特徴的な植物には、ハクサンコザクラ、ハクサンオオバコ、ツガザクラなどがあります。



ハクサンコザクラ

尾根の一方では雪が少なく、反対側では雪が多いため、それぞれに違ったタイプの草原ができ、そこに咲く花も異なります。僧ヶ岳の夏を飾る多彩な花も、雪の量や雪どけの早さと微妙に関わりながら適応し、自分の生育地を決めています。山を歩くとき、目の前の花の美しさばかりでなく、その背景にまで思いを巡らせると、自然の違った一面が見えてくるかもしれません。

シリーズ

埋没林の仲間たち ⑩

カエデ属 (カエデ科)

秋の山を彩る紅葉。冬を前にして植物たちが見せる一大スペクタクルです。そしてその主役格となるのがカエデ属、一般に言われるモミジの仲間です。

最もなじみの深いのは、庭園などに植えられ真っ赤に紅葉するイロハモミジでしょう。日本に自生するカエデ属は変種などを含めて30種類以上あり、葉の形や色もさまざまです。

カエデというと普通は手のひら型に切れ込んだ葉を想像しますが、ヒトツバカエデやチドリノキなど切れ込みのないものもあります。色も、



ヤマモミジ



ヒトツバカエデ

赤ばかりでなく種類によって黄色、橙色などがあり、同じ種類でも場所や日当たりの具合などによって色が違う場合もあります。

*

富山県にはイロハモミジの変種のヤマモミジや、大きな葉のハウチワカエデなど30種類以上、魚津市には20種類以上のカエデ属が山野に自生しています。

魚津埋没林では、各地層から少量のカエデ属の花粉が検出されています。

お知らせ

●3月までの行事予定

☆企画展示

12月1日(水)～12月28日(火)
魚津の美しい自然と祭写真コンテスト作品展
1月2日(日)～3月31日(金)
写真展 天然記念物

☆博物館教室

10月23日(土) 紅葉と洞杉・蛇石
2月26日(土) 蜃気楼の実験と観察

ご利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時 (入館は4時30分まで)
- 休館日 12月～3月の月曜日、祝日の翌日、年末年始(4月～11月無休)
- 入館料 ・大人(高校生以上)・・・510円 ・小中学生・・・250円
- 交通 ・JR北陸本線 魚津駅 } 下車1.5km (タクシー・・・5分)
- ・富山地方鉄道 新魚津駅 } (徒歩・・・25分)
- ・北陸自動車道魚津ICから3km車で10分

特別天然記念物 魚津埋没林博物館

〒937-0067 富山県魚津市釈迦堂814 ☎(0765)22-1049
ホームページ <http://www.city.uozu.toyama.jp/nekkolnd/>
e-mail nekkolnd@city.uozu.toyama.jp

